

「援助のパートナー」との 連携を促進したい



JICA企画部
国際援助協調課
調査役

林 遼太郎
HAYASHI Ryotaro

大学卒業後、2004年に国際協力銀行(JBIC)に就職。開発第3部東欧担当、パキスタン担当、総務部総務課(いずれも当時)、JICA南アジア部を経て、2010年8月より現職。

南アジア部時代、森林管理に取り組む円借款事業のための調査で、インドのタミルナド州を訪問。現地の森林局職員から、異なる樹種の植林に伴う土壌への影響について説明を受ける

国際機関や、アジアを中心とした新興国との連携を担当する、JICA企画部国際援助協調課の林遼太郎さん。援助のパートナーとの協力体制を築きながら、援助効果の最大化に取り組んでいる。

も

ともと旅行が好きで、学生時代は休みのたびに東南アジアの国々などを回っていました。所属していたインカレサークルでは、カンボジアへのスタディツアーを企画したこともあり、こうした途上国での経験などを通して、「一人の日本人として、世界のために貢献したい」と、考えるようになり、当時の国際協力銀行(JBIC)に就職しました。

入行後は、東欧の国々やパキスタンを対象とした円借款の案件監理などを経験。旧JICAとの統合後の2008年10月からは、成長著しいインドでの円借款の案件形成などを行ってきました。

現在の部署では、国際機関やアジア各国の援助機関との連携強化に携わっています。中でも私の担当は、アジア開発銀行や、韓国、中国、タイといった、援助の新興国と呼ばれる国々の援助実施機関と協力関係やネットワークを構築すること。各機関とは定期的に連絡を取り合い、援助に関するさまざまな情報を共有しているほか、役員クラスの対話・意見交換時にも、必要な資料・書類などの準備、先方との調整などを任されています。また、私自身も同席し、各機関の担当職員とできるだけ顔を合わせるようにして関係づくりに努めています。

ます。個別の案件を担当する以前の業務とは全く異なりますが、さまざまな組織の間で進んでいる議論や新しい動きを最前線で感じることができ、毎日多くのことを学んでいます。

その中で、このところ特に緊密な連携を図っているのが、昨年、経済協力開発機構/開発援助委員会(OECD/DAC)に加盟した韓国の援助実施機関である「韓国国際協力団(KOICA)」と韓国輸出入銀行内の「対外経済協力基金(EDCF)」です。今後の世界的な援助の方向性について話し合われる、「第4回援助効果向上に関するハイレベルフォーラム」(2011年11月、釜山)に向けた協議も始まっており、日韓両援助機関によるさらなる連携の可能性や共同研究の成果の活用などについて、積極的に意見交換を行っています。

最近、あるEDCFの職員に言われたことで、特に印象に残っている言葉があります。それは、「日本はアジアの奇跡に長年にわたって貢献してきた。欧米の価値観が主流のDACなどの国際的な議論の場で、JICAはアジアの奇跡を知る組織として、自信を持ってその経験を伝えていってほしい」というもの。JICAに対する期待と信頼感が伝わってきた、背筋の伸びる思いがしました。また、

彼らと日々接している中でも、「JICAから学ぼう」という彼らの姿勢を強く感じることであります。こちらからもさまざまな経験を伝え、良い点はどんどん取り入れていってほしいと思いますし、そのためのお手伝いは最大限していきたいと考えています。

国際援助協調課の業務の目的は、JICAによる支援の一般的なイメージとは少し趣が異なるのかもしれませんが、なぜならば私たちが目指すのは、日本の援助機関としての発想を超え、新興国の援助機関や国際機関など、JICA以外のリソースと連携し、それらの力を活用しながら、いかに援助の効果を最大化していくか、ということだからです。

今後さまざまな援助のパートナーたちと力を合わせ、援助の恩恵が助けを必要とする人々や地域すべてに効果的に届けられるよう、またそうした成果を一つでも多く国際社会に向けて発信できるように、各機関との連携強化に取り組んでいきたいと思っています。



KOICA関係者とのハイレベルフォーラム4に向けた定期協議に出席する林さん(左端)